

連立与党を構成する自民・公明両党が惨敗した第五〇回衆院選。投開票日翌日の各種報道に気になる記事があった。公示前から四倍増の二八議席を獲得した国民民主党の勝因を分析した記事だ。政策本位で与野党を問わず協力する「対決より解決」の現実路線が政権批判票の受け皿になったこと、インターネットによる選挙戦で支持政党のない若年層に食い込んだことなどを躍進の背景に挙げていた。

各種報道によると、国民民主党は今回の衆院選で、動画投稿サイトで党の関連動画の総再生数一億回を目指す「一億プロジェクト」を展開。より多く再生してもらうため、支援者に演説の切り抜き動画を作成するよう呼びかけたという。玉木雄一郎代表は「小さな政党は、地上波テレビや新聞で取り上げられる機会が少なくなる。何十万回と再生された動画もあり、政党名や政策を多くの人に知ってもらえた。ネットとリアルを組み合わせるなかで、支持が広がっていったと実感している」などと述べ、「ネットどぶ板」選挙が得票につながったという認識を示した。

◇ ネット選挙は二〇一三年の公職選挙法改正で解禁されたが、数年前でも「ネット上で反応が良くても、得票が伸びない」などと指摘する声もあった。札幌市内のある陣

## 「ネットどぶ板」選挙時代のリテラシー

営は今回、公選法に抵触しないよう、同法に精通する市議を「SNS(ネット交流サービス)担当」に置き、X(旧ツイッター)などで発信した。ただ、同陣営の選挙活動は従来の「どぶ板選挙」が中心で、ネット選挙はその付け足しという印象だ。陣営幹部は「若者が最終的にどう行動してくれるか分からない」と述べ、手応えを掴みかねていた。

そんなネット選挙で、国民民主党はうまくネットユーザーの心をつかんだようだ。同党がネット戦略の参考にしたのが、石丸伸二・前安芸高田市長だったという点も面白い。石丸氏は、地元・安芸高田市で市議会議員や地元紙と対立し、論破していると言われる動画がネット上で人気を集めていた。

石丸氏が立候補した今年七月の都知事選は当初、小池百合子氏と蓮舫氏の二人による事実上の与野党対決の構図になると見られていた。石丸氏は具体的な政策を長く語るよりも、「政治屋を一掃する」「東京を動かそう」などとワンフレーズで呼び掛け、その切り抜き動画などが拡散された。それが為政者やメディアの既得権益に不満を持つ人たちに受け入れられたとみられ、約一六六万票を獲得して次点となった。

一大ムーブメントとなった石丸氏だが、その内実には疑問符もつく。筆者自身、石丸氏の市長時代の動画などを少なからず見てきたが、主張が必ずしも正しいとは思え

ず、なぜ人気なのかよく理解できなかった。都知事選でも政策議論が深まった印象はない。石丸フィーバーを見ていて「人気と内実が一致していない」と感じる一方で、約一六六万票という結果にネット選挙の恐ろしさが潜んでいるとも感じられた。

◇ 自民党の小泉純一郎元首相は「ワンフレーズ・ポリティクス」が得意な政治家だった。郵政選挙と呼ばれた二〇〇五年九月の衆院選で、郵政民営化に反対する所属議員を改革に反対する「抵抗勢力」と呼んで圧勝した。この時はテレビや新聞などオールメディアによってムーブメントがつけられた。今回の衆院選で国民民主党がワンフレーズ・ポリティクスだったと言うつもりはなく、内実が伴っていなかったとも思わない。むしろ、「手取りを増やす」とスローガンに掲げ、「二〇三万円の壁」の見直しを訴えるなど、わかりやすい公約が奏功したと思う。

◇ 少なくとも、今はつきり言えるのは、多くの政党や陣営が今後、石丸氏や国民民主党の成功例を参考にネット選挙をより活用していくことだ。もし仮に、内実のない政党や候補者が成功例を活用すれば、選挙の結果、ひいては日本の未来はどうなるか。有権者にはネットの情報を見極める力(リテラシー)がより一層必要になる。

△陽▽